

序論)

皆さん、おはようございます。今日は、私たちの信仰にとって「いちばん大切な中身」を一緒に確認していきたいと思います。

みなさんは、何かを作ろうとするとき、説明書をちゃんと読まれるでしょうか？説明書をちゃんと読まずに何かを組み立てようとするとうまく失敗することがよくあります。例えば、家具を急いで組み立ててみたら、最後にネジが余ってしまって、後になって大切な部分を締めておらずガタガタするようになってしまった。とか、美味しい料理を作るつもりで、ネットで評判のレシピで料理してみたけども、手順を飛ばしたら、思った味にならなかったとか、「分かったつもり」で進めると、あとで困ることがよくあります。押さえておくべき手順とか、内容をちゃんと中身を押さえておかないと、土台が崩れて、求めていた結果に通じないことがあります。

私たちの信仰も同じです。正しく握りしめておくべきものを、しっかりと握りしめていなかったならば、その信仰は「中身のない」「実を結ばない」無駄なものになってしまうのではないのでしょうか。

来週の箇所に出てきますが、この手紙が書かれたコリント教会には、復活を疑う人たちがどうもいたようで、彼らの信仰の土台が揺れていました。

だから、パウロは改めて自分たちが語ってきた福音、そして、教会の人たちが信じてきた福音がどのようなものだったかを説明しています。

私たちも今日の箇所を通して、私たちが握りしめるべき福音とはどういうものなのかを改めて確認していきたいと思います。

1) 福音によって立ち、救われる (1-2 節)

まずは、1 節、2 節を読みましょう。

15:1 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。

15:2 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。

パウロはまず、コリント教会の人たちを「兄弟たち」と呼びかけます。問題の多い教会でしたが、それでもパウロは、愛をもって彼らに呼びかけているのです。

そして、彼はこう言います。「私があなたがたに宣べ伝えた福音を改めて知らせるけども、あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っている存在なのだ」と、ここがすごく大切です。

私たちは、何となくの信仰によって神様を賛美し、共に礼拝を献げているわけではなくて、パウロが語り、そして、今も教会で語られる一つの福音によって、同じ信仰を持ち、同じ救いの上に立っているのです。だから、パウロとコリント教会を繋げるものは福音であり、そして、私たちからしてみると 2000 年前の信仰者であるコリント教会の人たちと、今の私たちを繋げるものも福音なのです。

私たちの信仰の中核ともいえる福音とは何なのか。これを正しく握りしめていなければ、私たちは同じクリスチャンとはいえないのです。

事実、パウロは 2 節でこのように言っています。「私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。」パウロたちが語った福音こそ、私たちを救うものなのです。

だから、これをしっかりと握りしめていなければ、救われているとは確信をもって言うことができないし、この世のいろいろな間違っただけの教えや考えに騙されてしまうということも大いにあり得ることだと思います。

2 節の後半は「そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。」という表現になっていますが、元のことはちょっと違います。

2 節を直訳するとこんな感じになります。

「そして、そのためにあなたがたは救われます。

もし、どんなことばで私が福音を宣べ伝えたかを、あなたがた保持していれば、もし、無駄な信仰でないならば、」

「保持していれば」と「無駄な信仰でないなら」というのは同格です。

だから、パウロたちが伝えた福音を覚えていないなら、信仰が無駄な信仰に変わるのではなく、パウロたちが伝えた福音をしっかりと握りしめていないということは、イコール 救いに繋がらない空しい信仰を持ってしまうということです。

ここでのポイントは、しっかりと「保持する」ということです。ギリシャ語ではカテコーといって、握って離さない、しっかりと保つ、という言葉です。

信仰というのは、何かを“ぼんやり信じる”ことではありません。福音という中身があって、それをしっかりと握りつづける。それが信仰です。

ここで誤解しないでいただきたいのは、救いが「私たちの頑張り」で決まるということではありません。救いは、私たちの熱心さや記憶力の良さにかかっているわけではありません。救いは、信じている“内容”になのです。

時々、日本の神社の中では、祀られている御神体と言われているものが何かを隠しているところがあります。ある牧師先生は神社に行って、この神社は何を信じているんですかってことを一生懸命聞いたんだけど、答えてくれなかったみたいです。でも気になっていろいろ調べているうちに、その神社で祀られているのは、その神社を建てる時にお祈りして川から一番初めに流れてきたものをご神体としようと思ったそうなんです。それで、最初に流れてきたのが馬糞か何か、そういうものだったみたいです。だからその神社は自分たちが何を祀っているかというのをしきりに隠していたようであります。多くの神社とかの信仰はそれで成り立っちゃうところがあるんですけども、でも本当の救いに通じる信仰はそれじゃいけないのです。

福音とは何か、それをしっかりと握りしめていない信仰は、空しい信仰で救いには通じないのです。だからこそ私たちは 2000 年前から多くの人によって語られてきた一つの福音をしっかりと握りしめる、そういう信仰を持つていく必要があります。

2) 最も大切なこと (3-8 節)

ではその福音の中身とは何でしょうか。それが続く 3 節から 8 節の部分となります。

ここでパウロは、「最も大切なこと」として、2 つのことを書いています。それはキリストが死なれたということと、キリストはよみがえられた。ということです。

① キリストは死なれた

まずはキリストが死なれたということを見ていきます。3 節と 4 節の前半です。

15:3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

15:4a また、葬られたこと

キリストは、私たちの罪のために死なれました。ただ十字架にかかって死んだだけではなくて、私たちの罪のために死なれた。キリストの死の原因は私たちの罪だったということです。そしてその罪を解決するために、キリストは十字架にかかって死なれました。

しかもそれは主イエス・キリストの思いつきによってなされたことではない。「聖書に書いてある通り」、つまり神様の預言に従って、神様の計画の通りに、イエス様は十字架の上で死なれたのです。

ここでいう聖書というのは、特定の箇所のことを指しているのではなくて、聖書全体のことを指していると思いますけども。あえて旧約の預言をここで一回見てみたいと思います。イザヤ 53 章 4 節、5 節

イザヤ書

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

イエス様はまさにこの預言の通りに私たちの罪という病を負って十字架の上で死なれました。でも人々はそのことを理解できないから、イエス様は自分を神の子だと自称して神様を侮辱したから十字架にかけられているんだと、そういうふうに誤解しイエス様を馬鹿にして殺したのです。そのイエス様の十字架が私たちを罪から解放し、私たちを癒してくださった。

だから私たちはまず何よりもこのイエス様の十字架の意味をしっかりと握りしめていかなければいけない。しかもこのイエス様の十字架の死は見かけだけ形だけの死ではないんですね。

ときどき、イエス・キリストは実際には本当に死んだのではなくて仮死状態だったんだ。それで後から蘇生して、墓から出てきたんだ。そういうことを言う人もいますけども。でもイエス様はですね、ちゃんと葬られたのです。

皆さん、お墓に入れる時に、死んだことを確認せずに、お墓に入れる人いますか？ 昨年末と今年、私は 2 つの葬儀をしましたが、誰かが亡くなった時には死亡診断書が書かれて、その診断書を元に火葬許可書が出て火葬され、そして火葬後は埋葬許可書が発行されて埋葬時にはその許可書を確認して埋葬されます。人が葬られるためには。そのように何回もその人が死んだことが確認されるのです。

イエス様も確かに死なれたことが確認されました。それはイエス様が十字架の上で死なれた後、兵士たちがその脇腹を槍で刺したときにです。イエス様が刺された後どうなったのでしょうか、水がバーッと出てきました。それが死んだことの証明です。兵士たちがそのようにしてイエス様が死んだことを確認したので、イエス様は正式にお墓の中に葬られました。

ですから、私たちは使徒信条を礼拝で告白するときに「葬られ」って言っていますが、あれは、「イエス様は間違いなく死なれましたよ」ということの告白なのです。

主イエス・キリストは私たちの罪のために死なれました。それは仮初めの、見せかけだけの死ではなくて、肉体の死が伴った完全な死です。主イエス・キリストは私たちのために、私たちの身代わりとなって完全に死んでくださったのです。

だから、罪人としての私たちはイエス様と一緒に完全に死んだことになるのです。

これが、私たちが握りしめるべき第一のことです

② キリストはよみがえられた

そして私たちが握りしめるべき第二のことは「キリストは三日目によみがえられた」ということです。4 節の後半を読みましょう。

15:4b また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

よみがえりは、ただの“心の復活”ではありません。死に対する勝利です。

ここが揺らぐと、信仰の土台が揺らぎます。なぜなら、私たちの救いは「死に勝利されたキリスト」によって支えられているからです。

ここでも、パウロは「聖書に書いてあるとおりに」と言っています。

キリストの復活を示す箇所として代表的なのが詩篇 16 篇 10 節です。

詩篇 16:10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。

でも、より直接的な預言としてはホセア書 6 章 2 節になると思います。

ホセア書 6:2 主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。

「私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる」って書いていますね。神様は、十字架だけではなく、復活もそのご計画の通りに成就してくださいました。だから私たちもキリストと共に甦ることができるのです。罪人としてはキリストと共に十字架で死んだけれども、神様の子どもとしてはキリストと共によみがえったのです。だから私たちは十字架だけではなくて復活も福音としてしっかりと握りしめなければいけません。

しかし当然、この復活の出来事というのは多くの人に受け入れられません。もし誰もそれを見た人がいないのであるならば、初代教会の人たちも信じることができなかったかもしれません。でも主イエス・キリストの復活は多くの人に見られているんですね。なぜならば、キリストは多くの人に実際に現れてくださったからです。そのイエス様が現れた人のリストが 5 節から 8 節となります。

15:5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

15:6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。

15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。

15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

ここにキリストがその姿を見せてくださった人物として挙げられているのは、ケファ（つまりペテロ）。十二弟子、五百人以上の弟子たち、さらにはヤコブ、すべての使徒と、パウロです。7 節に出てくるヤコブは使徒のヤコブではなくって、イエス様の兄弟のヤコブです。このヤコブは最初イエス様のことを救い主とは信じていませんでした。おそらく変なお兄ちゃんがいるなど、そんな感じだったんでしょう。

でも、このヤコブはやがてどうなったかという、エルサレム教会を牧会する指導者になっていくのです。さらに 7 節後半に出てくる使徒というのは、十二弟子だけのことでなく、初代教会において、くじで選ばれた使徒であったり、それ以外の使徒的な権威が与えられた人たちのことも含まれていると思います。

その上で、最後には「月足らずで生まれた者」つまり、未熟児のような無力な存在であるパウロに対しても、キリストは現れてくださいました。

復活のキリストに会ったのは一人や二人だけじゃないんですね。500 人以上の弟子たちも見ているし、初代教会が始まった後、使徒的な立場として用いられた人たちにも現れ、そしてパウロにも現れたんです。

これはつまりキリストの復活が幻想や創作物語ではなくて、客観的な証人を伴う歴史的事実だったということです。

しかもですね、この手紙が書かれた当時に既に召されてしまった人もいるけども、実際にまだこの時には生きて、その生き証言をちゃんと確認できる状態にあったことが 6 節に補足として書かれています。つまり当時やろうと思えば本当にあったかどうかを裏取りすることができる状態にあったということです。

もしこれが幻想だったり、まやかしだったり、嘘であったならば、その生き残っている人たちに個別に取材したら矛盾していること、証言が合わないことっていうのも当然出てくると思います。でも、出てこないで同じことを彼らは語り続けてきたから、福音として人々に信じられて受け入れられてきたのです。

実際パウロは 11 節でこのように言っています。11 節読みましょう。

15:11 とにかく、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

つまりパウロや他の人たちも同じことを福音として語り続けたということです。それぞれがバラバラのことを証言したのではなくて、同じことを人々に語り続けてきたのです。なぜ？それが事実だからですね。

神様は聖書が書いている通り、つまり神様のご計画の通りにイエス・キリストを十字架の上で殺し、間違いなく死なれ、そして間違いなく聖書の通りに三日目によみがえられ、間違いなく多くの証人の前で、蘇ったキリストが現れてくださったのです。

だから私たちはこれをただの「教え」ではなくって、事実として客観的な現実として握りしめていかなければいけません。

皆さん、時々、キリスト教を自称する人の中にも、この復活とか処女降誕とか、そういうのは弟子たちが語った「教え」であって、客観的な事実として信じる必要はないんだと、そういうことを言う人がいます。

でも違うのです。聖書は、これは間違いなく多くの人が見た実際の出来事なんだよって教えてるんですね。だから私たちがそれを実際にあったこととしてしっかりと握りしめていくことが大切です。

3) 恵みの実例

そしてこの事実はただの出来事では終わりません。一人の人の人生を変えた恵み

として人の中に働きかけていたのです。それを説明しているのが 9 節 10 節です。

15:9 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。

15:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。

ここに、先ほど確認した。キリストの十字架と復活という福音には、確か人の人生を変える力があるという“生きた証拠”があります。それがパウロ自身です。

パウロは、もともと教会を迫害した人でした。自分でも言っています。「使徒と呼ばれるに値しない」。・・・先程の「月足らずで生まれた者」という表現を借りるのならば、未熟児として死んでいるも同然、助けがなければ生きることができないような、そんな霊的に死んでいたパウロが、「神様の恵みによって、私は今の私になりました。」と言っています。

どうなったのでしょうか。彼はどの使徒よりも多くの働きをし、どの使徒よりも多くの地域で福音を命がけで宣べ伝えるものとなったのです。これはパウロがすごいからでしょうか？いいえ、違います。パウロは実際に福音宣教のために働いたのは自分ではなく、私と共にあった神の恵みなんだと証言しています。

皆さん、福音は、罪人を赦し、死んだ者を生き返らせ、人生を根本から新しくしてください。

だからこの福音をしっかりと握りしめるときに神様の救いの恵みはその人の中で豊かに芽吹いて無駄にならずに済むのです。

私たちの歩みも同じです。

「私はふさわしくない」「私は失敗した」「私は弱い」。そう思う時こそ、キリストが私のために死んでくださったということ、そしてその死なれたキリストは、3 日目によみがえって私たちにもよみがえりの恵みを与えてくださるということです。そのことを思い出してしっかりと握りしめるべきではないでしょうか。

なぜならば、福音による神様の恵みは、私たちを縛り付けていた罪や弱さから私たちを解放し、救われた「今の私」へと変えてくださるからです。

そしてその恵みは、パウロの人生を 180 度変えてくださったように、私たちの人

生を変えて、生き生きとしたものへと変えてくださるのです。

結論)

皆さん、パウロがこの箇所でも何度も繰り返して語っていることは、とてもシンプルです。それは、「最も大切なこと」を取り違えてはいけない、ということです。

私たちの信仰の土台は、私たちの熱心さでも、行いでも、感情でもありません。それは、キリストが私たちの罪のために死なれ、そして三日目によみがえられた、この福音の事実です。

この福音によって、私たちは立たされ、この福音によって、私たちは救われ、この福音によって、今も生かされているのです。

だからパウロは、「最も大切なこと」として、これ以上でもこれ以下でもない福音を語りました。そして、その同じ福音を、私たちもまた信じ、受け取り、握りしめているのです。

私たちの信仰生活の中で、迷いや不安、失敗や弱さを覚えることは少なくありません。「自分は本当に救われているのだろうか」「こんな自分でもいいのだろうか」と思うこともあるでしょう。しかし、そういうときこそ、私たちは自分自身を見るのではなく、福音の中身に立ち返る必要があります。

キリストは、私たちの罪のために確かに死なれました。そして、そのキリストは確かによみがえられました。この事実は揺らぎません。そして、この事実の上に立つ信仰は、無駄になることはありません。

パウロが「神様の恵みによって、私は今の私になりました」と告白したように、私たち一人ひとりも、「神様の恵みによって、今ここに立たされている」のです。

どうか私たちは、福音を「知っているもの」としてではなく、「今日も握りしめて生きるもの」として、大切に続けていきましょう。

この福音こそが、私たちの信仰の土台であり、希望であり、命です。

この福音を握りしめ、パウロのように大胆に証しし続けていきましょう。